



一 はじめに

大学図書館にはさまざまな役割がある。教員・研究者にとつては研究拠点、学生にとつては勉学の場、大学にとつては大学の文化を社会に示す顔でもある。本稿では特に、大学図書館と教育との関係——教員と学生双方にかかわる側面——に焦点を当ててみたい。

過去十数年の間にインターネットが普及し、社会の情報化は著しく進展した。必要な知識や情報は書物からではなく、「ネット」から手軽に得られると考える学生たちが増えるのも無理はない。インターネット上に公開されたさまざまな異なる文書が古典も明らかにされないまま切り貼りされ、一つのレポートとして提出される事例にも遭遇する。ワープロ以前の時代であるならば、まだ「書き写す」ことによる学びもあっただろう。しかしいまでは、うっかりすると、そのレポートを提出した学生本人が、利用した文献の内容をよく読んでいないのかどうかも怪しいのである。図書館を利用して、できるだけ多くの本を読み、知識を増やして思考能力を養うだ

考えてみたいと思う。

二 「ゼミツアー」

多くの図書館で行われているガイドンスタアと同様、明治大学図書館の「ゼミツアー」も、二百二十万冊を所蔵する本学図書館の施設やその利用方法を学生によく知ってもらうことが主眼の一つであり、すでに長い間実施されてきた。しかし、二〇〇〇年度に授業科目として「図書館活用法」が開講され、情報検索等を体系的に教育する活動が別途開始されたのを契機に、「ゼミツアー」の役割と内容は新たに検討され、以降、毎年改善を重ねてきた。

「ゼミツアー」の特徴は、個々の授業科目を担当する教員の要望に応じて、図書館が図書館の施設・資料案内、情報検索実習などをコーディネートするところにある。要望があった授業の二コマ九十分の授業時間を活用するので、「ゼミツアー」が実施される授業日には、学生たちは教室を離れて図書館にやってくる。一年生に対する導入教育を目的としたゼミや、上級学年を対象とした専門性の高いゼミなど、授業によって館内案内の重点や、必要資料、検索実習の内容は異なるため、それらを教員と事前に確認し、効果的な教育支援を実現している。図書館員による資料説明や検索実習指導、及び、担当教員による専門的立場からのバックアップを受け、学生たちが自立的に学習・研究を深めていけるよう手助けす

けでなく、情報を的確・批判的に選別する力もつけてもらいたいと思うのだが、それは欲張りな話だろうか。

翻つて今日の大学図書館に目を向けると、そこには古今東西の膨大な文献資料のみならず、多様な電子資料も備えられている。高度化・情報化した図書館は、大学に入ったばかりの学生たちにとって迷宮のようなものである。適切な利用の手引きがなければ使いにくいだけでなく、その存在意義さえ認識されないままに終わってしまう。「どの本を読んだらよいかわからない」「高校までと違い資料が多すぎて、どう利用したらよいかわからない」といった声が、学生へのアンケート調査から聞こえてくる。貴重な文献資料を死蔵させないために、図書館利用のハードルを引き下げる工夫が必要となってくる。

明治大学図書館はこうした背景を踏まえて、「ゼミツアー」と「学部間共通総合講座「図書館活用法」」（以下「図書館活用法」という取り組みを続けている。図書館を大学教育の中心へといま一度引き戻し、図書館のもつ教育力を大学教育に生かすために何ができるのか、これらの取り組みを通じてるのである。

「ゼミツアー」については、教員にアンケートの回答を二度お願いしている。実施直後には、ツアー内容の改善点などを指摘してもらうためのアンケートを行い、さらに年度末には、それぞれの授業においてツアーの教育効果がどのような形でみられたかを回答していただくのである。教育効果については総じて評価が高く、特に、レポート・論文作成の際に図書館所蔵の資料がより多く活用されるようになった、またレポート等の質も向上している、という指摘は図書館にとつてうれしいものであった。

明治大学の三キャンパス（駿河台・和泉・生田）全体で、ここ数年「ゼミツアー」の参加者は増加している。文系学部の一・二年生が学ぶ和泉キャンパスでは、二〇〇六年度には二千四百人以上の学生が「ゼミツアー」を通じて図書館利用のノウハウを学んでおり、二〇〇四年度統計の一・三一人に比べると、二倍以上の増加である。

三 「図書館活用法」

明治大学には「学部間共通総合講座」という授業科目があり、コーディネーターとなる教員が、学内外の講師の協力を得て、現代社会の諸課題に対応できる人材育成を目的に、全学部学生を対象とした学際的テーマの連続講義を開講することができ、「図書館活用法」は、図書館が主体となって二〇〇〇

月・日	テーマ	担当者	月・日	テーマ	担当者
1 4月18日	大学図書館への招待	商学部教授 広沢 絵里子	8 6月6日	新聞・雑誌情報の探し方(1)【実習】	図書館整理課 柴尾 晋 図書館総合サービス課 矢野 恵子
2 4月25日	インターネット講習	図書館庶務課 丸山 郁太郎	9 6月13日	新聞・雑誌情報の探し方(2)【実習】	図書館整理課 柴尾 晋 図書館総合サービス課 矢野 恵子
3 5月2日	明大図書館の施設・蔵書・サービス -和泉図書館を中心に-	図書館和泉図書課 中村 正也	10 6月20日	書物の愉しみ -四面書架の宴-	商学部准教授 久松 健一 村田 治芳
4 5月9日	図書館情報の探し方(1)	図書館整理課 金澤 敦子 図書館整理課 伊藤 朋子	11 6月27日	レポート・論文の書き方	商学部教授 広沢 絵里子
5 5月16日	図書館情報の探し方(2)	図書館整理課 金澤 敦子 図書館整理課 伊藤 朋子	12 7月4日	インターネット情報の探し方【実習】	図書館庶務課 中林 雅士 図書館庶務課 丸山 郁太郎
6 5月23日	図書館と歴史と図書館	図書館生田図書課 高橋 美子	13 7月11日	様々な文献の取り扱い方【実習】	図書館和泉図書課 中村 正也 図書館総合サービス課 平田 さくら
7 5月30日	図書館による情報の探し方	図書館総合サービス課 平田 さくら	14 7月18日	図書館と著作権	図書館事務部 飯澤 文夫

年度にスタートさせた学部間共通総合講座の一つである。半期科目で二単位が修得できる選択科目であり、学生は所属学部の規定に従い修得単位を卒業要件に加えることができる。図書館利用を手ほどきする導入教育的要素があることはもちろんだが、卒業後の社会生活に必要な知的能力までを視野に入れて「図書館活用法」は、和泉キャンパスを中心に全キャンパスで開講されており、多くの学生が受講している。

「ゼミツアー」が、ゼミ単位の主題や目的に焦点を合わせたオンデマンド方式の図書館利用教育であるとすれば、「図書館活用法」は、半期にわたる授業時間を生かし、図書館利用の実際と情報リテラシー教育を組み合わせた体系的な教育内容となつている(「資料」を参照のこと)。「ゼミツアー」では網羅しきれない情報・資料検索技術を講義及び実習を通じて学ぶほか、よいレポート・論文を作成するために必要な基本的技法とマナー、著作権の問題等を学ぶ機会を提供している。コーディネーターの教員(図書館副館長)をはじめとする教員講師と、図書館の専門職員とが講義担当を分担し、協働して教育にあたつていところが本講座の大きな特色である。

講義内容も、実学的要素と、図書を通じた学びの楽しさを伝える教養科目的要素を併せもつように配慮されている。

単位修得の条件として、学生は期末レポートの提出をしながらはならないが、二〇〇六年度からこのレポート執筆にはいささか複雑な条件が加えられることになった。与えられた

主題に関して、図書だけでなく、新聞・雑誌記事、インターネットなど、さまざまな情報源から必要な資料を複数収集し「文献表」を作成すること、また、読んだ資料を論述の本文中に「引用」し、出典を「注」に示すことを義務づけ、一定の論文形式を踏まえたエッセイを執筆しなくてはならない。

「図書館活用法」で学んだ知識・技術・情報源を、自分の論述を組み立てるときに実際に役立てられるかどうかが評価のポイントである。また、引用を通じて著作権への意識を高めてもらい、自分と他者の知的産物それぞれを認識させることも狙いである。エッセイの主題は、全学部学生対象の授業であるため、「少子化」や「格差社会」など、大学生として知っておくべき現代社会の諸問題を中心に選んでいる。

学生による授業評価を見ると、「図書館活用法」で学んだ内容は、他の授業にも応用できるものとして評価されている。文献資料検索と、レポート・論文執筆の連関についても理解が深まっているようである。何のために、どのように図書や資料を集め、読み、自分の発想に基づいてそれらをどう活用するか、という流れが見えてくるのである。

「図書館活用法」が開設された背景には、学生の活字離れ、図書館離れがあった。当時の図書館スタッフは、学生をいかに図書館に呼び戻し、開かれた図書館にしてゆくかという問題をめぐって議論を重ねたということである。今日では、「ゼミツアー」と「図書館活用法」という双方の取り組みが互いに

に補完し合いながら、図書館を積極的に利用する学生たちを育てると同時に、学生の自立的な学力の底上げにも貢献していると言えらるだろう。

四 おわりに

学部における担当授業で「ゼミツアー」を利用したり、「図書館活用法」の講義を担当したりすることで、筆者は図書館の教育活動に携わる機会を得たのだが、この経験を通じて、図書館と日頃の授業との関係について改めて考えさせられた。教員自身が図書館を意識的に、またできるだけ計画的に教育活動に取り込むことの重要さを認識するようになったのである。学生の活字離れを嘆くだけでなく、授業の中で図書館を使わざるを得ないような仕掛けをつくり、学生の勉学の幅を広げてやるような工夫をもっとしてゆくべきではないか。それは、ゼミだけでなく、外国語の授業や、講義科目でも工夫次第で可能となる。明治大学図書館が組織的に行っている利用者教育も、学生への学習支援だけでなく、教員の教育活動を積極的にサポートする意味合いをもっているのである。

教員は、つい研究者の立場から、研究上の使い勝手や所蔵資料の点から図書館を評価しがちであるかもしれない。しかし、大量の図書との格闘がもたらす教育効果を考えると、図書館を授業に取り込み、図書館を大学教育の中心へと引き戻す意味は大きいと思われる。